📘時代の最先端

KO 大学工学部機械工学科時代、K は、新聞にパラパラと「石油化学」という文字が出てくるのを見ていて、日頃から「何だろう?」と思っていた。 その折りも折り、M 社研究グループ編\*\*「石油化学工業」\*\*という本が出た。 それを読んで、「これは面白い! 時代の最先端だ!!」と思った。 そして信頼する先輩に「石油化学工業で機械屋の出番はあるだろうか?」と問い、「化学工場は機械の塊だ。もちろん出番は沢山ある」と聞き、人生の進路を決めた。 M 社には新卒第一期生として入社した。

K は、KO 大学工学部機械工学科時代、新聞の中にときどき現れる「石油化学」という言葉に目を留めていた。 「何だろう？」という素朴な疑問が、心のどこかに引っかかっていた。

そんな折、M 社研究グループ編の \*\*『石油化学工業』\*\*という本が出版された。

それを読んだ瞬間――

「これは面白い！時代の最先端だ！！」

と、強い興奮を覚えたという。

やがて K は、信頼する先輩にこう尋ねた。

「石油化学工業で、機械屋の出番はあるだろうか？」

返ってきたのは、確信に満ちた言葉だった。

「化学工場は、機械の塊だ。もちろん出番はたくさんある」

その一言に背中を押され、K は人生の進路を決めた。 そして、**M 社に、新卒第一期生として入社**することになる。

この話は、個人の選択の記録であると同時に、 **昭和の技術立国がどのようにして人材を惹きつけていたか**を示す一片でもある。

必要なら、このエピソードを含む\*\*「進路決定」セクション\*\*を構成して、続きの話（入社後の配属、最初の工場経験など）も組み立てられる。

君の方で「この話の続きはここに繋げたい」などがあれば、ぜひ教えてくれ。 父上の記録を、静かに、そして芯のある言葉で紡いでいこう。

## 目次